

朝の礼拝

聖書 詩編 126 編 1-6 節 (旧約聖書 971 頁)

- 1 主がシオンの捕われ人を連れ帰られると聞いて  
わたしたちは夢を見ている人のようになった。
- 2 そのときには、わたしたちの口に笑いが  
舌に喜びの歌が満ちるであろう。  
そのときには、国々も言うであろう  
「主はこの人々に、大きな業を成し遂げられた」と。
- 3 主よ、わたしたちのために  
大きな業を成し遂げてください。  
わたしたちは喜び祝うでしょう。
- 4 主よ、ネゲブに川の流れを導くかのように  
わたしたちの捕われ人を連れ帰ってください。
- 5 涙と共に種を蒔く人は  
喜びの歌と共に刈り入れる。
- 6 種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は  
束ねた穂を背負い  
喜びの歌をうたいながら帰ってくる。

涙と共に種を蒔く人は

詩編は聖書の中でも最も古い時代、紀元前1500年から200年頃までに歌われたものです。聖書のルーツ、源と言ってもいいでしょう。長い戦乱と放浪の歴史に翻弄されながらも、家族や親族、仲間を案じ、この世を去った先祖を想い、そして日々感謝し、旅路の平安を祈った人々の記録です。

シオンとは現在のイスラエルの首都エルサレムです。そこには古代から神殿があり、祈りの場、魂の故郷でした。しかし、紀元前6世紀の中頃、バビロニア帝国が侵略し神殿を破壊し、古代イスラエル人を連行して奴隷にしたのでした。それから50年という歳月が流れて帝国は滅び、新しくペルシャ帝国が興り、新しい王は彼らを解放

してエルサレムへ帰すことにしたのです。その喜びを歌ったのが今日の詩編です。

故郷を奪われ、幽閉された身であっても生きていくために子どもに食べさせ、自分も食べていかなければいけません。どんなに悲しくても、辛くても、この世に残った者は生きていかなければなりません。「涙と共に種を蒔く人は 喜びの歌と共に刈り入れる。」との歌には神様の救いを待ち望みつつ世を去った先祖の苦難と、解放の知らせに歓喜する子孫の祈りが歌われているのです。

どんな人にも抑えられない感情があり、息をするのも辛く生きるのが難しいと感じることがあります。しかし、その生きている存在そのものを祝福している神様がいます。とても小さい存在でも、けなげに生きる姿を愛おしく、尊い存在だと見守る方がいます。すべてを委ね、すべてに望みをかけることのできる方がいる幸せを、この詩人は伝えているのです。

祈禱 祈りましょう

私たちを愛し、励まされる主よ。

あなたは私たちの希望、救いの源です。私たちは、今、祖国を離れ、異国で生活する移民の人たち、貧しさや争いのため難民となっている人たちのために祈ります。どうか互いの偏見や差別に気づいて、互いに敬い合う心を与えて下さい。今日一日も、すべてをあなたに委ね、あなたの祝福のうちに歩ませて下さい。

主イエス・キリストの御名によってお願いいたします。アーメン